

# 保育園における幼児の排泄自立と トイレ環境・排泄援助の影響

村上 智子

保育園におけるトイレトレーニングを進める上でのトイレ環境の違いと排泄援助の違いが幼児の排泄自立にどのように影響するのか、また、排泄自立を促すための方策は何かを明らかにしようと、トイレ環境の異なる2つの保育園において、1歳児クラスを中心に、幼児の排泄の様子と保育士の援助の様子を観察し、クラス担任にアンケート調査と聞き取り調査をおこなった。さらに、幼児数名の排泄の記録をクラス担任に依頼した。その結果、幼児が、①日常的にひとつ上のクラス児の様子を見て、次の段階のあるべき姿（憧れと喜び）を認識する、②遊びの時間から排泄の時間へと生活の区切りを認識する、③お漏らしに対する安心感と緊張感を持ちながら排尿感覚を得る、ことが排泄の自立につながり、したがって、トイレトレーニングをする時期の幼児に対して、これらにつながる環境を整えたり、排泄の援助をすることが有効ではないかと考えられた。

## 1. はじめに

筆者らの研究<sup>1)</sup>において、20年以上勤務している保育士に、「3歳未満児の様子で気になることや、昔の子どもと現在の子どもの様子の違い」を尋ねると、基本的な生活習慣の項目において「排泄の自立が遅い」との回答が際立って多かった。また、3歳以上児においても、「おむつをして登園してくる子が多い」との回答があった<sup>2)</sup>。堀井ら<sup>3)</sup>によると、保育園に通園する幼児の排泄の開始時期は10年前の調査と比べると6か月から1年程度遅くなっている。筆者らの研究<sup>1)</sup>においても、園では子どもの発達に合わせてトイレトレーニングを開始しても、家庭でオムツを使用するなど「保護者の理解と協力がなかなか得られない」ため、トレーニングが進まないという悩みを持っている保育士もいた。

そこで、保育園でのトイレトレーニングの取り組みを調査し、子どもの排泄自立へ促すための方策を考察したいと考えた。本研究では、その一段階として、保育園におけるトイレトレーニングを進める上でのトイレ環境の違いと排泄援助の違いが幼児の排泄自立にどのように影響するのか、また、排泄自立を促すための方策は何かを明ら

かにしようとした。

## 2. 方 法

トイレ環境の異なる2つの保育園において、1歳児クラスを中心に、幼児の排泄の様子と保育士の援助の様子を観察した。また、クラス担任にアンケート調査（資料1）を行うと同時に、聞き取り調査をおこなった。

さらに、幼児数名を取り上げ、クラス担任による排泄の記録を依頼した（資料2）。項目は、オムツ替え（排泄）の時間、子どもの様子、保育者の気づき・援助・保育プログラム、保護者へのはたらきかけおよび家庭での様子であった。排泄の様子は、おしっこ（うんち）をしていた、自分で尿意（便意）を知らせることができた、トイレに誘って排尿（排便）ができたかも、記号で記入するようにした。記録した期間と記録頻度は、A保育園は2008年6月～2009年3月の週1～2回、B保育園では2008年5月～2009年2月の週3回であった。

各園の排泄記録の対象児は以下のとおりである。

### < A 保育園 >

A：平成19年3月11日生・男児、B：平成19年3月11日生・女児、  
C：平成19年3月17日生・女児、D：平成19年4月1日生・女児

### < B 保育園 >

E：平成18年7月24日生・女児、F：平成18年11月28日生・男児、  
G：平成19年1月11日生・男児

なお、一般的には、各クラスの配属児は4月1日現在での満年齢で決める。そのため、年度途中でクラス名の年齢を超える児がでてくる。たとえば、4月1日現在で0歳児クラスに配属された11か月児は、3月末には1歳10か月児になる。したがって、後の文に0歳児クラスの「幼児」という表記をした箇所がある。

## 3. トイレの環境

### < A 保育園 >（資料3-1）

1. 2歳児混合保育室であり、トイレは保育室から約9m離れて位置する。床と壁面の一部がタイル張りで、床から1.2mより上はガラス張りになっている。床面は廊下との段差があり、幼児はスリッパを着用する。男児用トイレと和式トイレが各1つある。1歳児クラスの幼児は、保育室内で2つのオマルを使用しており、他の活動中は保育室の棚に収納されている。

### < B 保育園 >（資料4-1）

1歳児保育室の横にトイレがあり、排泄援助時に木製引戸を開ける。床と壁面の一部がタイル張りで、床面は保育室との段差はない。幼児はスリッパを着用する。男児

用トイレ1つと洋式トイレが2つある。

#### 4. トイレトレーニングの流れ

##### < A 保育園 >

0歳児クラスでのオマルの使用は試し程度であり、1歳児クラスに進級してから保育室内でオマルを使ってのトイレトレーニングを本格的に進め、2歳児クラス進級まで続けている。排尿間隔が長くなると布パンツを穿く。2歳児クラスに進級すると、和式トイレを使ってのトイレトレーニングを始める。保育士一人を配置し、最初は幼児一人ひとり、保育士に抱えられて和式トイレにまたいでしゃがむ。この段階になって、トイレットペーパーの使用と水を流す経験をする。

0歳児 クラス	・オマルの使用は試し程度（遊んでしまうため） *衣服の着脱はB保育園に比べて早期に始めている
1歳児 クラス	・保育室内でオマルを使ってのトイレトレーニングを本格的に始める ・排尿間隔が長くなると布パンツを穿く
2歳児 クラス	・和式トイレを使ってのトイレトレーニングを開始 ・保育士に抱えられて和式トイレにまたいでしゃがむ ・トイレットペーパーの使用と水を流す経験をする

##### < B 保育園 >

0歳児クラスでオマルの使用から1歳児クラスの洋式トイレの使用に移行を済ませて進級する。また、オマル使用前に保育士が作った手づくり遊具で、「またぐ」動作を経験する（資料4-2）。1歳児クラスでは、0歳児クラスの時と同じ洋式トイレを使ってトイレトレーニングを1年間かけておこない、2歳児クラスへと進級する。この間、トイレットペーパーの使用や水を流す経験をする。2歳児クラスのトイレは1歳児クラスのトイレと同型の洋式トイレであり、保育者は便器に座らせる援助はしない。布パンツの使用は2歳児クラスになってからである。

0歳児 クラス	・オマルの使用から1歳児用の洋式トイレの使用へと移行を済ませる *オマルの使用前に、「またぐ」動作を遊びの中に取り入れている
1歳児 クラス	・0歳児クラスの時を使用していた洋式トイレで1年間かけてトイレトレーニングをする ・トイレットペーパーの使用や水を流す経験をする ・進級前になると、布パンツにオムツを重ねて穿く
2歳児 クラス	・2歳児クラスのトイレは1歳児クラスと同型のもの ・2歳児クラスになってから布パンツの使用へ移行 *和式トイレは就学前に経験させるために4・5歳児用トイレに1つある

#### 5. 1歳児クラスの排泄援助

1歳児クラスの担任におこなったアンケート調査の内容（抜粋）を以下に示す。

< A 保育園 >

<p>○ねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・進級するまでにトイレやパンツに慣れる</li> <li>・自力で排尿することを覚える</li> </ul>
<p>○排泄援助の手順</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他児が行っているトレーニングやオマルに興味を持つ</li> <li>・オムツ交換の時間にオマルに座ってみる</li> <li>・排尿の間隔が長くなってきたら、布パンツを穿く</li> <li>・一人ひとりの排尿のリズムをつかみ、オマルを使用する</li> <li>・ズボンやパンツを脱いでトイレで排尿してみる</li> </ul>
<p>○環境設定の工夫や配慮</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オマルを使用している</li> <li>・布パンツを持ってきてもらう</li> <li>・ズボン・パンツは着替え袋に入れず、子ども自身が直接、取り出せるようにしている</li> <li>・おむつ交換時にはクラス担当の2/3人の職員を配置する</li> </ul>
<p>○気にかかっていること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・洋式トイレがない、トイレが保育室から遠い</li> <li>・オマルの数が少なく、収納場所が少ない</li> <li>・オムツの収納場所がない、ズボンやパンツ専用の収納場所が欲しい</li> </ul>
<p>○現状の改善のための考え</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1. 2歳児クラスは保育室の横にトイレが必要</li> <li>・(設備なども含めて、)園全体でトイレトレーニングに力を入れて取り組むべき</li> </ul>

< B 保育園 >

<p>○ねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個々の排泄の自立</li> <li>・進級までに全員トイレでの排尿経験を1回はする</li> </ul>
<p>○排泄援助の手順</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・名前を呼び、トイレに誘う</li> <li>・ズボンやオムツを脱ぐ(手伝いながら、できるだけ自分ですよう促す)</li> <li>・便器の方へ促す</li> <li>・一人ひとりの様子に合わせて排泄を見守る</li> <li>・オムツやズボンを穿く(手伝いながら、できるだけ自分ですよう促す)</li> </ul>
<p>○環境設定の工夫や配慮</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個々の排尿間隔を把握し、早めに誘う子と遅めに誘う子を分ける</li> <li>・月齢に合わせ、保育士が一对一で排泄を見守り、援助する</li> <li>・保育士もトイレ内に入り、着脱や排泄を近くで見守り、子どもの状態や様子をすぐに把握できるようにしている</li> <li>・壁面装飾をしてトイレに対して興味付けをする</li> </ul>
<p>○気にかかっていること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・寒くなると、トイレに来たがらなくなる</li> </ul>
<p>○現状の改善のための考え</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・月齢に分かれて保育士と一对一のかかわりをしながら援助しているが、時間的に余裕がなかったりするので、一人ひとりに関わり援助していく必要がある</li> </ul>

## 6. 排泄記録（抜粋）

1歳児クラスの担任による排泄の記録を以下に示す。

< A 保育園 >

\* ( )内は歳、か月

A (男児)	11/10 (1.7) お風呂前にトイレに行くのが習慣となっている（家庭）。11/13 (1.8) オマルに座らせると排尿できた。11/15 (1.8) 起床後トイレで排便（家庭）。12/18 (1.9) 今日からトレーニングパンツ。大喜び。12/22 (1.9) 午前中パンツを濡らさず過ごす。1/19 (1.10) パンツを穿きたがり寝る時も「オムツ+パンツ」（家庭）。1/26 (1.10) パンツで登園。昼寝のときもパンツでOK。2/2 (1.10) トイレでの排泄を練習。
B (女児)	12/1 (1.8) オマルに座ると排尿。12/29 (1.9) 日中、オムツが濡れていないことが多くなる。1/5 (1.9) パンツを持ってきてもらう。1/19 (1.10) パンツを穿いて過ごす。オマルからトイレに移行。3/9 (1.11) 日中はパンツで過ごせた。
C (女児)	10/27 (1.7) 自分でオムツを下げ、排尿しているのを眺める。12/22 (1.9) 「うんちでる」と知らせ、オマルに排便。1/27 (1.10) 家庭にパンツを持ってきてもらうよう連絡。2/2 (1.10) オマルに排尿。今日からパンツになり喜ぶ。3/2 (1.11) だいぶ漏らすことが少なくなってきた。
D (女児)	9/29 (1.5) 他児がオマルに座ると自分も座りたがるが、オムツに排尿してしまっている。家庭ではトイレで排尿できた。11/19 (1.7) パンツで昼まで過ごす。母親が休日の日はパンツで過ごしているとのことで、パンツをもってきてもらう。1/19 (1.9) トイレで排尿。1/29 (1.9) 昼寝の時のみオムツ。2/9 (1.10) 寒くなり、排尿間隔がずれてくる。パンツが濡れたことに気づき、一人で着替える。2/16 (1.10) 寒いこともあり、漏らしてしまうことが多くなる。

< B 保育園 >

\* ( )内は歳、か月

E (女児)	5/21 (1.9) トイレに興味あり。自分で脱いで便器に座るが排泄なし。5/23 (1.9) 力んでいるのでトイレに誘うが嫌がる。結局オムツに排便。6/13 (1.10) トイレで排尿。以降、時々トイレで排尿。7/4 (1.11) トイレでの排泄を意識し始める。10/17 (2.2) 遊びに夢中になりトイレに来たがらない。11/7 (2.3) 排尿間隔が長くなる。11/10 (2.3) 便器に長く座れるようになる。11/26 (2.4) オムツに排便。「うんちした」と教える。12/1 (2.4) 便器に座ると「おしっこでたよ」と伝えるが排泄なし。1/7 (2.5) 友達がトイレで排尿している様子を見るが多くなった。座るとしばらく中を覗き込んでいる。
F (男児)	5/21 (1.5) 1回トイレで排尿。5/26 (1.5) トイレに嫌がらずに来る。毎回トイレで排尿。1回は自分から「ちーちー」と訴える。6/2 (1.6) 遊びに夢中でトイレを嫌がる。便器に座ると出るか出ないかをじっと見ている。以降、トイレには興味がある様子。6/16 (1.6) 2回トイレで排尿。お風呂で立って排尿する（家庭）。以降、波がありトイレでの排尿がない日が続く。7/11 (1.7) 遊びの途中でもトイレに行く姿がみられる。7/18 (1.7) オムツ・ズボンを自分で脱ごうとする。7/23 (1.7) 男児用便器につかまり排尿しようとした。7/25 (1.7) 3回トイレで排尿。男児用便器で初めてできた（1回）。以降、1～2回トイレで排尿。8/11 (1.8) 排尿しようとする時は自分から便器に座るが、それ以外は座ろうとしない。以降、トイレでの排尿はみられなくなる。8/25 (1.8) 3回トイレで排尿。以降、波がある。10/3 (1.10) トイレの時間が習慣化する。以降、トイレで排尿する日が増えてくる。11/17 (1.11) 寝る前に必ずトイレで排尿（家庭）。以降、寒いからかトイレで排尿しなくなる。1/5 (2.1) トイレで排尿するようになる。年末年始もほぼトイレで排尿した（家庭）。以降、安定してくる。1/30 (2.2) トレーニングパンツスタートする。

G (男児)	6/9 (1.4) トイレを嫌がっていたが、便器に少し興味を示す。6/11 (1.5) トイレに来れば便器に座る。6/25 (1.5) トイレで探索している間に排尿。少し驚いた様子。7/9 (1.5) トイレに嫌がらず来る。9/5 (1.7) オムツ・ズボンで自分ではこうとする。9/26 (1.8) トイレで排尿。9/29 (1.8) 1回トイレで排尿。きょうだいと一緒にトイレに行きたがる(家庭)。10/8 (1.8) 2回トイレで排尿。自分からトイレに来ることも増えた。10/29 (1.9) トイレでの排尿がみられなくなる。
-----------	--

## 7. 1歳児の排泄の様子と保育者の援助の様子

筆者が観察した、幼児の排泄の様子と保育者の援助の様子を以下に示す。

### < A 保育園 >

1歳9か月から1歳10か月になるとオムツからパンツに移行する。同時期にオマルからトイレ(和式)に移行する。和式トイレでの援助は最初のみで、幼児一人で排泄できる。

保育士は、パンツに移行したばかりの幼児が排尿感覚に気づかずお漏らしすることは当然のこととして捉え、お漏らしした幼児に対して大らかに対応している。幼児もお漏らしをしたことに対して罪悪感を抱いていないようである。また、保育士自身がトイレトレーニングに興味を持って積極的に取り組み、なによりも楽しんでいる。

### < B 保育園 >

オマルからトイレ(洋式)への移行は早いですが、トイレに行くのを嫌がる期間があったり、トイレで排泄するまでに期間がかかる。また、トイレでの排泄が安定してくるまでも期間がかかる。

幼児は布パンツにオムツを重ねて穿いている。これは、パンツが濡れることによって排尿感覚に気づけるようにしたいが、お漏らししたことに対して幼児が羞恥心を抱かないように、との保育士の配慮からである。B保育園の保育士も本研究をきっかけにトイレトレーニングに興味を持ち、積極的に取り組んでいた。

## 8. 考 察

トイレの環境からみると、1つめに、A保育園は和式トイレ、B保育園は洋式トイレであるという、大きな相違点がある。本研究を始めるきっかけとして、「B保育園のように洋式トイレの場合、0歳児クラスでのオマルからの移行は同じ『またいで座る』という行為のため、比較的スムーズにできる。また、1歳児クラス、2歳児クラスと進級しても、同型の洋式トイレでありトイレトレーニングの流れはスムーズである。一方、A保育園のように和式トイレの場合、オマルからの移行のハードルが高い。それは、幼児が和式の穴に対して落ちる感覚を抱くため、穴にまたぐことに抵抗感があるからである。また、パンツなどを全て脱がなくても排泄できる段階になると、パ

ンツなどを膝の位置で保ち、上着を持って濡れないようにすることも幼児にとっては困難なことであり、さらに、和式トイレにしゃがむという行為は、相応の筋力の発達が必要である。したがって、和式トイレに移行する前段階のオマルの使用は、洋式トイレに移行する場合に比べて長期間になり、さらに、和式トイレに移行することは、幼児にとって高いハードルである」と考えていた。

しかし、A保育園の幼児は、1歳9か月から1歳10か月になるとオムツからパンツに、同時期にオマルから和式トイレに移行し、さらに、和式トイレでの援助は最初のみで、幼児一人で排泄できるようになった。A保育園の保育士は、「あつという間に幼児が和式トイレで排泄できるようになった。最初はトイレの穴をまたぐことを怖がっていたが、すぐに一人でまたげるようになった。あまり抵抗感を示さなかった」と言っている。A保育園の幼児にとって、和式トイレにまたいでしゃがむ動作は、身体面、精神面ともにそれほど難しいことではないようであった。

現在の家庭では洋式トイレが中心であり、幼児は洋式トイレの使用頻度が高く使い慣れている。和式トイレを使用することは、1歳児クラスの幼児に型の異なるトイレを使い分けることを強いているのかもしれない。A保育園でも、2歳児クラスで和式トイレを経験し、洋式トイレに改築した後に3歳児クラスに進級した幼児の多くは、洋式トイレを好んで使用している。しかし、少数ではあるが、和式トイレを好んで使用する幼児もいる。和式トイレがまだ世の中に存在し、特に多くの小学校は和式トイレを設置しており、小学校進学前の年長児は保育園で（幼稚園でも）和式トイレの練習をする。年長児になると和式トイレで上手に排泄ができず、抵抗感を示す幼児も多いと聞く。このことを考えれば、年齢が低いうちに和式トイレを経験して慣れるのもよいのかもしれない。トイレの型と排泄習慣に関することは、今後も継続して研究していきたいと思う。

トイレの環境からみた2つめは、0．1．2歳児の保育室の位置が、A保育園とB保育園では異なることである。A保育園は、0歳児クラスは独立した空間であり、1．2歳児クラスとは離れているが、1．2歳児は混合クラスであり同じ保育室を使用している。一方、B保育園は0．1歳児の保育室はオープンスペースであり、2歳児クラスは壁で仕切られた独立した空間である。A保育園の0歳児クラスの幼児は、オマルをトイレと認識しておらず、オマルで遊んで使用できなかった。しかし、1歳児クラスの幼児は「パンツへの移行」「トイレでの排泄」がスムーズであった。一方、B保育園では「オマルに座る」「トイレへ移行する」が0歳児クラスの幼児でできた。しかし、オマルからトイレへの移行は早いですが、1歳児クラスでトイレに行くのを嫌がる期間があったり、トイレで排泄するまでに期間がかかっていた。また、トイレでの排泄が安定してくるまでの期間が長かった。このことは、ひとつ上のクラス児の様子が日常的に見える保育室の環境にあったことが影響したのではないかと推察される。

A保育園の0歳児保育室は独立した空間で1歳児保育室とは離れた場所にある。また、0歳児クラスは保育室でオマルを使用して排泄しており、1歳児クラスの排泄の様子を見ることはできなかった。しかし、1歳児クラスと2歳児クラスは混合クラスであり、2歳児クラスの排泄の様子を日常的に見ることができ環境にあった。したがって、0歳児のオマルの使用はスムーズに進まなかったが、パンツへの移行からトイレでの排泄までの流れはスムーズに進んだのではないかと思われる。一方のB保育園は、0歳児保育室と1歳児保育室がオープンスペースでつながっており、1歳児ク

ラスの排泄の様子を日常的に見ることができる環境にあった。しかし、1歳児保育室と2歳児保育室は仕切られており、かつ、使用するトイレも各クラスに専用のトイレが設けられている。したがって、0歳児クラスのオマル使用、トイレへの移行は早かったが、トイレでの排泄が安定するまで時間がかかったのではないと思われる。

トイレの環境面からみた3つめは、保育室とトイレの位置が、A保育園とB保育園では異なることである。A保育園の1、2歳児クラスの保育室とトイレは9m程離れている。一方のB保育園は保育室とトイレは隣接している。

A保育園の1歳児クラスは、オマル使用を始めて排泄ができるまでの期間が短かった。このことは、排泄の時間になると遊んでいた玩具などを片づけ、保育室にオマルを置くことで、遊びの空間から排泄の空間に切り替わり、幼児に排泄の時間を認識させることができたからではないか。同様に、保育室からトイレの位置が離れており、空間を移動することが、幼児にとって、排泄の時間と認識することにつながったのではないだろうか。つまり、幼児が生活の区切りを認識できたことが、排泄の自立に影響を与えた、ということである。しかし、住空間と排泄空間は衛生上、区別することが望ましい。また、保育室からトイレが遠く離れているということは、幼児が排尿感覚を得ても、トイレまでの移動時間がかかり間に合わない可能性もあるため、トイレトレーニング期にはふさわしい環境とはいえない。

しかし、空間の切り替わりや移動だけでなく、保育者の援助によっても、生活の区切りを幼児が認識し、排泄を意識できるのではないだろうか。保育者の援助からみた1つめは、保育者のトイレの誘い方である。A保育園は、保育室からトイレが離れているため、排泄の時間になると、保育者の言葉がけにより、幼児が数名ずつ並んでトイレに向かう。一方、B保育園は、保育室とトイレは隣接しており、幼児が遊んでいる間に保育者が一人ずつ順番に幼児をトイレに誘っていた。時折、幼児が遊びに集中し、保育者がトイレに誘っても来たがらない幼児の姿が見られた。B保育園の1歳児にとって、遊んでいる間にトイレに誘われることで、遊びの時間と排泄の時間の「生活の区切り」がつきにくかったのではないだろうか。

保育者の援助からみた2つめは、オムツからパンツに移行する方法が、A保育園とB保育園では異なることである。A保育園は、パンツに移行するのが早く、また、保育者はパンツへの移行期の幼児がお漏らしすることを当然のこととして捉えていた。A保育園は1、2歳児が混合クラスで同じ保育室で生活しているため、1歳児クラスの幼児は2歳児クラスの幼児のパンツ姿を日常的にみることができる。したがって、1歳児クラスの幼児は「パンツを穿く憧れ」と「パンツを穿く喜び」を抱いており、保育者は、この幼児の気持ちを大切に受けとめていた。また、お漏らしをした幼児に対して、保育者が大らかに対応することによって、お漏らしをしても受けとめてくれる保育者の存在で「安心感」を得ているながらも、やはり、お漏らしをすると気持ち悪いため、「漏らす緊張感」も持っているのではないだろうか。この緊張感が、排尿感覚を敏感にさせているのかもしれない。A保育園の1歳児クラスが比較的早くオムツからパンツに移行できたのは、幼児が「パンツを穿く憧れと喜び」と「お漏らしの安心感と緊張感」を持っていたからではないだろうか。

一方、B保育園の1歳児クラスのオムツが外れるまでの期間は、A保育園より長期間であった。B保育園は、日中、布パンツにオムツを重ねて穿いていた。これは、パンツが濡れることによって排尿感覚に気づけるようにしたいが、幼児がお漏らしした



ことに対して羞恥心を抱かないように、との保育士の配慮からであった。しかし、オムツからパンツへの移行初期の段階では、排泄の時間になってトイレに向かってみると、パンツが濡れていることがある。パンツに排尿していてもオムツが尿を吸収してしまい、排尿したことを幼児が伝えないと保育者が気づかないのである。矢倉ら<sup>4)</sup>に「おむつ交換を頻回にすることが、児のおむつ汚れに対する反応も敏感にし、自立への第一歩となることが明らかになった」とあるように、幼児は排尿したことに保育士が対応することによって「排泄したら知らせる」ことを習得していくことを考えると、布パンツにオムツを重ねて穿く方法はこの機会を逃しているのではないだろうか。また、オムツからパンツへの移行後期の段階では、お漏らしをしていても服や床を濡らすことが少ないので、お漏らしに対する安心感は得られるが、お漏らしに対する緊張感は得られにくいのではないだろうか。このように考えると、布パンツにオムツを重ねて穿くことは、幼児が排尿感覚に敏感になる機会を妨げていたのかもしれない。

## 9. まとめ

保育園にはさまざまなトイレ環境があり、保育者の援助もさまざまであるが、幼児が、①日常的にひとつ上のクラス児の様子を見て、次の段階のあるべき姿（憧れと喜び）を認識する、②遊びの時間から排泄の時間へと生活の区切りを認識する、③お漏らしに対する安心感と緊張感を持ちながら排尿感覚を得る、ことが排泄の自立につながるのではないかと思われる。したがって、トイレトレーニングをする時期の幼児に対して、これらにつながる環境を整えたり、排泄の援助をすることが有効ではないかと考えられた。

B保育園の保育士は「一度トイレで排尿を経験すると、排尿感覚が身につくようだ。トイレに座ってからの時間がかかっても、幼児は集中して排尿するのを待っている姿がみられる。また、トイレで排尿できたら『見て』と言い、保育士が見て褒めるまで流そうとしない」と言っていた。幼児がおよそ1年にわたるトイレトレーニングを経てトイレで排泄することができるようになることは、大変な喜びであり、達成感を得る機会でもある。また、自分の生理現象に気づき、意識して身体をコントロールすることも、同時に習得している。これらの貴重な経験をする幼児に対して、保育者はトイレ環境と排泄の援助を万全に整えたい。

## 10. 以後の取り組み

本研究のための排泄記録は、2009年3月に終えた。その後、各園が本研究に協力した経験を活かして、トイレトレーニングを意識したトイレ環境の改善や保育の見直しと新たな取り組みを始めているので、その一部を紹介したい。

### < A 保育園 >

念願の洋式トイレへと改修し、暖房機具も設けた（資料3-2）。便器周辺に仕切りを設け、保育者の援助を重視したオープンな空間から、幼児のプライベートに配慮

した空間へと変化した。歩行できるようになった幼児が排便（排尿）するとき、カーテンに隠れたり、誰もいない隣室へ移動する姿を見かけることを考えると、幼児にとっても排泄はプライベートな行為であり、このような配慮は必要であろう。また、保育室の床面とトイレの床面の段差を解消させるためにすのこを敷いた。さらに、1歳児クラスと2歳児クラスの保育室を分け、1歳児クラスは0歳児クラスの隣の保育室に変更した。0歳児クラスと1歳児クラスの保育室がトイレに近いので、トイレの出入りに柵を設けた（数年後に引き戸に変更）。3歳以上児用のトイレも、1つは和式トイレとして残した以外は、洋式トイレに変更した。

#### < B 保育園 >

「排泄の自立」をテーマに園内研修を継続した。その内容を2010年11月に本学短期大学部子ども学科の学科行事である「卒業生と保育を語る会」において、協力してくださった保育士とともに報告したので、以下に示す。

##### ○研究を始めてから気づいたこと

トイレに誘っても子どもたちが遊びに夢中でなかなか来なかったり、どの子から誘うかという順番を決めていなかったのでも、早く済ませることができる子と遅い子がいてトイレが混雑することがあった。子どもたちにとってトイレが興味ある空間だったり、一人ひとりのタイミングでトイレに誘えば、積極的に来るようになるのではないかと思った。

##### ○2010年度のねらい

「排泄の自立を促すために、リラックスできる環境づくりを考える」

##### ○物的環境の改善「トイレへの興味付け」

###### ①トイレにBGMを流す

ねらいにもある「リラックスできるトイレとは」を考える際、まず、「自分達の行きたいトイレとはどんなトイレか」を考えた。そこで、デパートなどのトイレに入ると、すてきな音楽が流れていることを思い出し、BGMの流れているトイレはおとなもホッと一息つくような感覚になるので、子どもたちにもよい効果があるのではないかと試みた。

実際に子どもたちの好きなアンパンマンなどの楽しい曲を流したところ、興味を持った子どもたちがトイレに来てくれるようになった反面、トイレから出るのを嫌がる子どもも多くなってしまった。BGMはトイレへの興味付けにはなったが、まだ音楽を聴いてリラックスしながらトイレをする段階ではないようだった。トイレに座って落ち着いて排泄できるようになった頃に、またチャレンジしたい。オルゴール曲など落ち着いた曲を流すことも検討している。

###### ②季節ごとに子どもの興味のあるキャラクターを装飾する

1歳児は新しいものや変わったものに興味を持つ時期なので、好きなキャラクターがあればトイレに行きたいと思うのでは、と思った。最初はトイレを明るく華やかにということで「宇宙船、星やハートの飾り」、次に子どもたちの大好きな「アンパンマンシリーズ」を貼った。1歳児クラスは男児が多いため、今は「はたらく乗り物シリーズ」

として自動車やバトカーなどを貼っている。

子どもたちは装飾に興味を持ってトイレに来てくれるようになった。はたらく車が好きなTくんが一番にトイレの装飾に興味を示し、「ガガブブ、カンカンブブー」と指を差していると、それに気づいたMちゃんもTくんの後からついてトイレに行ってみようとする場面がみられた。トイレの装飾を子どもの好きなものにしたたり、季節ごとに変えることにより、以前よりもトイレへの興味関心が増えてきたように思う。

### ③便座に座る方向に装飾する

装飾を貼った場所が、たまたま便座に座ったときにちょうど目の前に見える場所だった。装飾を見ながら排泄できるため、ねらいにある気持ちが落ち着く「リラックス」効果もあるように思う（リラックスしながら排泄ができています）。また、（その頃、幼児は「水タンクの方に向けてまたいで座る」から「水タンクを背にして便座に座る」へと移行する時期であり、座ると目の前に装飾があるため、）水タンクを背にして便座に座るといった、座る方向の習慣づけができた。

## ○人的環境（保育の流れ）の改善「トイレへの誘い方の工夫」

### ①「トイレを済ませてから遊ぶ」という流れをつくる

遊び始める前と、遊び始めて45分後に20～30分かけてトイレに促している。月齢の高い子は、だいぶ言葉も理解してトイレに行ってから大好きなもので遊べるという期待も少しずつ分かってきており、遊びの前に「ガッチャン列車でトイレに行こう」と誘い、トイレに行ってから遊ぶという流れができています。

### ②高月齢児からトイレに誘う

「ガッチャン列車」に興味が出てきて、楽しみながらトイレに行くようになった。そんな高月齢児の姿を見て、月齢の低い子がトイレに興味を持つようになった。今後は、まねをしながらトイレに行けるように誘っていきたいと思う。

### ③生活の区切りを意識づける

「トイレを済ませてから遊ぶ」という生活の流れを繰り返すことによって、子どもたちに生活の区切りを意識づけられるのではないかと考えている。また、高月齢児から時間差でトイレに誘うのでトイレが混雑しなくなったし、保育者も子ども一人ひとりに「トイレだよ」と誘ったり、誘っても来なくて困ったということがなくなった。子どもも保育者もリラックスしてトイレができるようになったのではないかとと思う。

## ○研究を始めてよかったこと

今回、研究を始めて「排泄」について意識するようになった。「排泄」について意見交換していく機会が増え、新たな知識や気づきを得ることができた。

## 【参考文献】

- 1) 村上智子 曾根章友 『ベテラン保育士が捉える子どもの変化（2）－3歳未満児の場合－』 山形短期大学紀要第41集 pp.101－115 2009

- 2) 曾根章友 村上智子 『ベテラン保育士が捉える子どもの変化(1)－3歳以上児の場合－』 山形短期大学紀要第41集 pp.77-99 2009
- 3) 堀井奈緒 前田美子 宮下朱里 宮本靖子 長谷川嘉奈子 廣瀬幸美 『幼児の排泄のしつけに関する研究－保育所(園)に通所(園)する児をもつ母親の意識とその関連要因－』 日本看護学会誌第13巻2号 pp.84-90 2004
- 4) 矢倉紀子 蓑原美奈恵 笠置綱清 『乳幼児の排泄自立に関する要因の検討－1歳6か月児を対象として－』 小児保健研究第50巻第5号 pp.582-586 1991

### 【謝辞】

本研究にご協力とご尽力いただきました、小百合第二保育園黄木淳一園長(当時)、1歳児クラス主任任今田睦美先生(当時)、上山あい保育園井上眞里子園長、1歳児クラス主任任坂野友美先生(当時)をはじめ、多くの先生方に心より感謝申し上げます。

### 付記

本論文は、日本保育学会第62回大会(2009年5月)において発表したものをもとにしている。

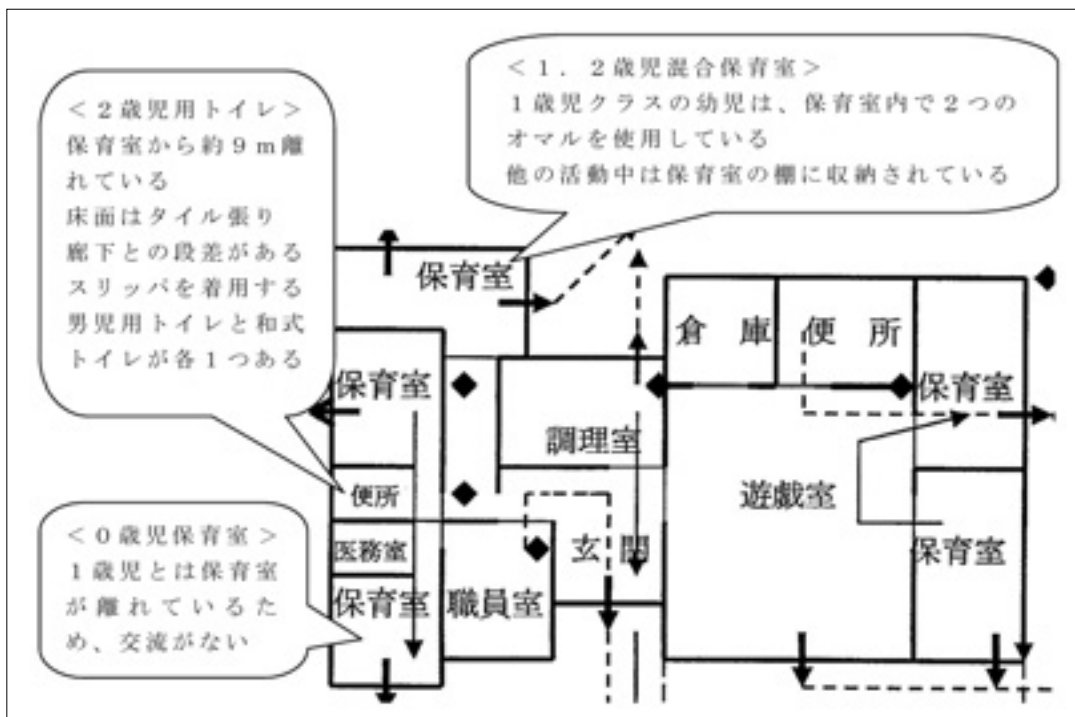
（資料1）

<p>保育園における排泄援助に関するアンケート</p> <p>担当クラスの排泄の援助のねらいはありますか？</p> <p>排泄の援助をどのようにしていますか？（排泄の呼びかけ～すべての終了まで）</p> <p>ねらいを達成させるために、環境設定において工夫や配慮していることはありますか？</p> <p>スムーズな排泄の援助をするために、 環境設定において工夫や配慮していることはありますか？</p>	<p>排泄に関して、保護者とどのように連携していますか？ また、気を付けていることはありますか？</p> <p>現在、排泄の援助において、気にかかっていることはありますか？ （子ども、保護者、保育者間の連携、空間（設備・備品）…）&gt;</p> <p>園児の状態をよりよいものに改善するために、どのようにすればよいと考えていますか？ （何のために、どのように、どれくらい、人材または空間（設備・備品）が影響か）&gt;</p> <p>ご協力、ありがとうございました。</p>
--	--

(資料2)

排 泄 記 録														
くみ	なまえ	生年月日	年	月	日	生	性	別	男	女				
~~~~~ (省略)														
月	日 ( )	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
排泄の記録 (記号で記入)		おむつ替え												
子どもの様子		保育者の気づき・援助・アツ など					保護者へのはたらきかけ及び家庭での様子 (特記すべきこと)							
月	日 ( )	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
排泄の記録 (記号で記入)		おむつ替え												
子どもの様子		保育者の気づき・援助・アツ など					保護者へのはたらきかけ及び家庭での様子 (特記すべきこと)							
《記号》	おしっこ	○	おしっこをしていた、 ◎ 自分で尿意を知らせることができた、 ⊕ トイレに誘って排泄ができた											
	うんち	△	うんちをしていた、 ▲ 自分で尿意を知らせることができた、 ⊖ トイレに誘って排泄ができた											

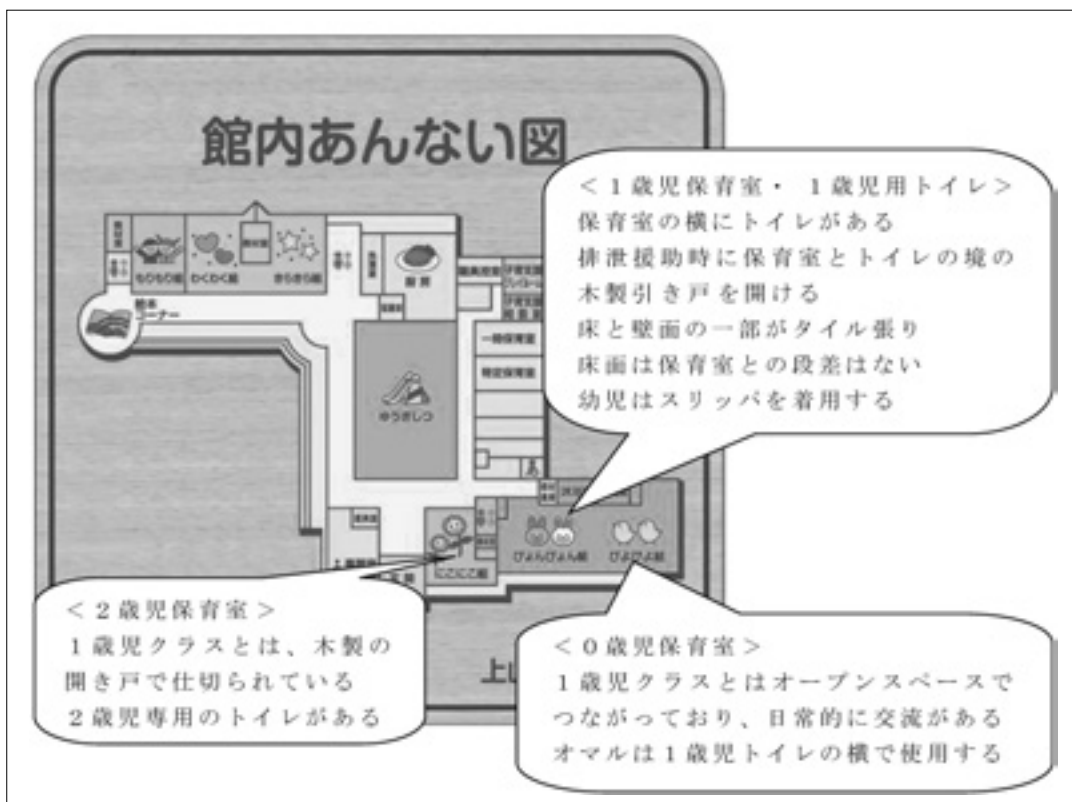
（資料3-1）トイレ環境 <A保育園>



（資料3-2）改修後のトイレ



(資料4-1) トイレ環境 <B保育園>



(資料4-2) 「またぐ」動作を意識した手づくり遊具

